

源氏活華子流

表傳授五拾四ヶ条秘事口授聞書



源氏活苑千葉流

表傳授五拾四ヶ条秘事口授少書

卷中巻条之内

由り巻の座席業前礼式列録

舎席法式之書

同外

源氏活花書院向表之卷

五拾四ヶ条目錄秘傳口授聞書

先花はいふんと思ひんをよかぢみして無理不  
屈曲なる枝葉を好まず花形をよこりよき志あり  
しをよそ花を枝の出生越ん立大輪ありよめい  
短くをりた葉少く葉多くは思ひくも活花をよ  
ぬし河海りよまどぐなる風かく活花はありす  
生るるよめい初きありのなきは一枝一葉を  
うちよ陰陽を分ち少いつのよ入ふも自  
然と志ありをよきも寝もせし起も皆ん

まゝるぬやうは片あびき籠の口紙比形く見立  
生ひ居るに活る事習なり居るくくくは和  
くみんゆわの布らいまわひはる記名のちりも  
瓜ぞにまゝるくくはいまわひなく死物となる  
あり花殺をくあく葉沢山やしく母葉も  
奇麗なまをく又まくなかぬやうは出生は  
義を遠くを自然と出生にくあひいまき花なり  
花いまれい子ほひをけすく仕立まはといり  
くゆれは富貴は花なる書院第一の花目出  
度莊り事源氏流乃習なり能く手練

何の事か事肝要なり

東武

杏翁齋法摺

千葉就卜述下

表之卷箇條に授秘傳抄書

一花教葉負乃事

書院の花母一花一葉四花四葉六葉六葉六葉を以て  
不用樂活總古歌たりとも是等ハ用授有入  
なり一六万物のけしめく一の教ハありしを教  
ありとくしとも一花一葉の活方ハ切紙の傳不  
海内志總古樂活もゆるさくふなり  
二六陰陽ありて天地なる  
三六天地人ありて陰陽を行あり  
五七九の教皆陽教を以ては是もよりしき

丁の敷は二つちうりて用

四六八ハ全く陰敷をて調ひつら敷なり是初ま  
なり形なり

六つの敷をゆうして用ゆら子あきと母是ハ  
調ある事母てこれ又剪紙の傳れよなれを  
け糸子不出活花ハ出生をす一とと家ゆ初  
何の形も活花なれ不動とのハ死物とて花  
より丁敷又出生のちのちも一とこれらも手  
練母よりてきひやうも一と何のハ毛一輪  
葉二枚花二輪葉三枚又ハ五枚と見合を

二種三本五種七本あきときふても先  
活かすも

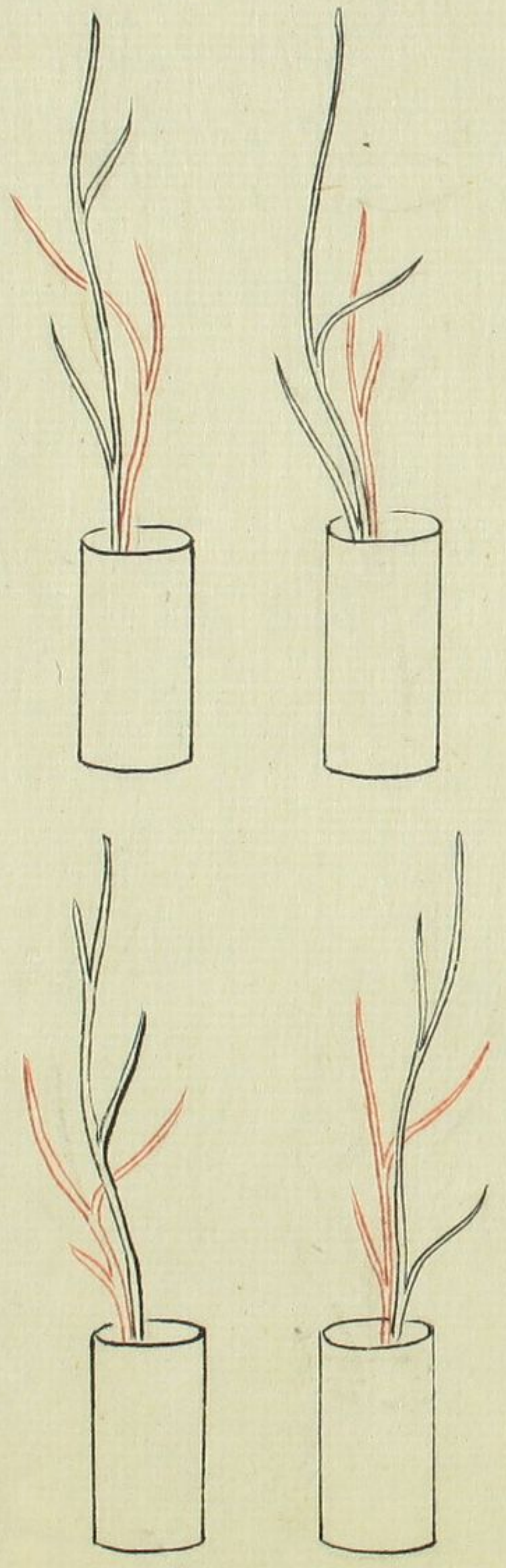
一葉汁葉汁乃事

花葉ともは揃ひつら出生のもの花汁葉汁  
用ひ活ら子習くも魚うらと志し出生より  
葉より花を中へ咲きとむらものもあり何のハ  
梅連葉 狗子柳の葉葉より花をやく咲く  
なりこれハきふと子細かしたとハ梅又水仙  
槎の類を何のハきふ事ハ合分一なる  
右花汁のもの二種一瓶をきふ事あり魚うら梅

又いのこ柳乃影ひなり余にあそくしてあしし  
 葉のなきりの二色きふ肉落として不程後なり  
 但しちまひふ葉何れもの葉なきを引ひ花  
 あらゆるの葉なきを引ひ花とていふも葉らん  
 ちまひふ葉枝大葉とていふも葉なきなり  
 一葉の活花は活へともきふ大葉一程の生方無  
 秘傳切紙傳授の葉なきの表傳はあそく  
 一十文字見切の事

此條はよく活方と禁むる出生をいふ活方  
 たる一葉の花枝のうち枝花葉とも十文字と

なりて見ゆりせしむたると二本乃出生ありは  
 二本あり



右四葉の趣にきり十文字はなぬやうに生るん  
 趣し見ゆり活方のうちより出て花をいふ  
 分をいふ 見ゆり活方  
 为本切なるし



右二瓶の如くならんをこかくしこふんかくし活  
 きの前より出て正花をさうりてかくを形をいふく  
 尺かくし男本  
 かくしなる也



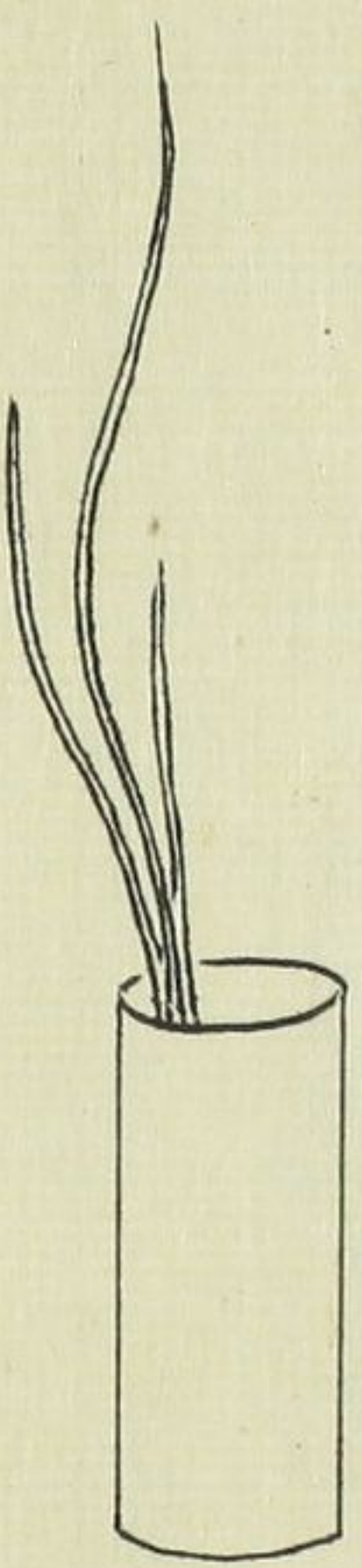
右二瓶を切出しこふて種よく切出し水まの

出生んくどして活んぬ花のなりをより出する  
 をいふ切葉指を多れつても習ふ故をいふなり  
 志し柳南天の藪小さき葉なると多くつもの  
 枝葉の中よりかくしちめておもふかく活とも  
 目たぬやうにかくし花の尺切の若くからん懸断  
 前より尺を切しあきかめて尺をさうり大枝より尺  
 子ぬ格は活なるといふし小枝小葉活し生する  
 うちよりなるかきたけい尺切ぬやう肝要く  
 一長競の事

切る花と葉のたけと回寸を種よくたす



寸尺の言サの花器は水際より梢まで寸尺  
 何の花を活るをたけくく魚といふあり回すを  
 三つふといはす事く活なまを花ハ氣差のたけは  
 一ふけまう二タたけ斗さうまう一花よりて  
 三ふけあるいハ三たけまもゆるまをくしはくを  
 太藪の藪を介はるるのたれものなびきもの  
 花新出生ふよりてハたけの何ありしるまを  
 ゆるまをくし

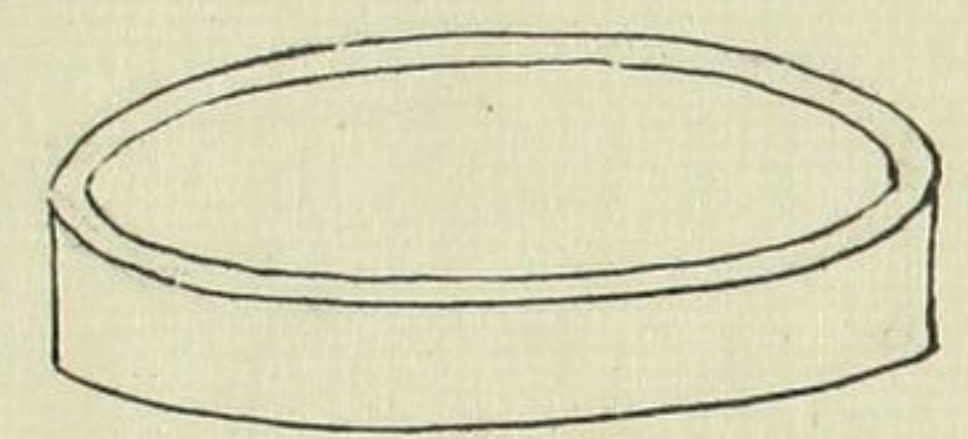


け花のたけよろ  
 花器を尺よりて  
 活花を尺五寸なり



け花のたけあ  
 花器を尺よりて  
 活花を尺なり 是を長競といふ

圓月形



け藪の花生ハ口のさくはし  
 の寸をたけよりて活花を  
 割魚し

一色切花固色乃事

色切といはくいろの居ま外乃色紙ハ事なり  
 たくハ赤き花紙の中ハ白き花を活はぬ

の事—をさむとしてきくふなり

同色と一回—くぬ草本は合せて二本二本  
活らばおかしらるの事を活らばあしき本も  
草本も色一様活の時くらしからん二重草りの  
花をよのけおもそんけみし

白梅は水仙白玉椿又ハ红梅は赤椿かと合せて  
きふ事—同色とくらしきなり

正花白梅は赤椿かと活らば—又ハ正花  
红梅なれば水仙白玉椿かと活らば—糸ハ推して  
あらぬ—

書院の花かゝは心よきハ数種活せしむけん  
ある—きくふ切同色ハ菊流きてハ大は嬉ふ

一花葉流く副さの事—

草本ともそを茎は花葉流揃ひつらりのハそ候  
きふぬしたくハ菊の類なり又菖蒲牡丹の  
類花と葉とハ別は生ひ出たりのなきハ別乃  
葉を別てきふそ葉の出生れ毎よそてよし

一菖蒲牡丹若れ葉ハ葉きひの事—

くすの類ハ一葉のうらみて陰陽のじうるなり  
葉はきふなり自然と風情阿るなり

ちりちり花を付けてはくハ紫うらおめてんて  
陰陽のうらあり葉先よりあまはまて葉先  
とをさへんはくハ銀葉とてきくふあり又葉の  
むらむらとるもまはまて平葉となりて働き  
あまハ死葉なり水際まて葉のむらむらと  
を付けて活る時ハ葉のうらまても陰陽自  
然とてあまなりあまハ中めて紫のむらむら  
むらむらとる銀葉とハまはくハ二本活る  
時を小葉とてまはくハ一本のむらむらと

んを葉母はくハむらむらと附くハあまおはしりく  
活なりあま手練よりハ

高蒲牡羊の葉ハ葉の出生よん附ハ葉先  
少ハむらむらの方ハまがりてあまハまを附  
出生またぐらぬやうハ活魚ハ出生またぐらぬ  
かハまがりハ

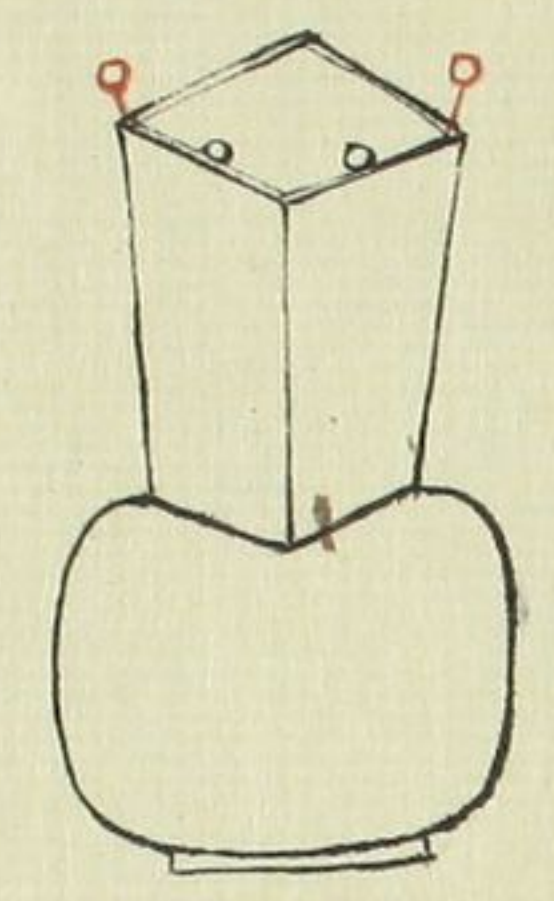
一向枝葉枝向花の事

向枝ハ葉のま向ハまはまてハ出花枝をむら  
むらむらハま後ハまはまてハ出花のむらむら  
まはまてハまはまてハ出花のむらむら

向花ハ花器の正面ハ花のま向ハなりてしこを  
 凡そ見る事あり他流ハ釘づくしといふこれハ  
 花ハ懸脚場ハ向ふ極ハ活らうめてたし  
 一角ハ花生身に毛器の事

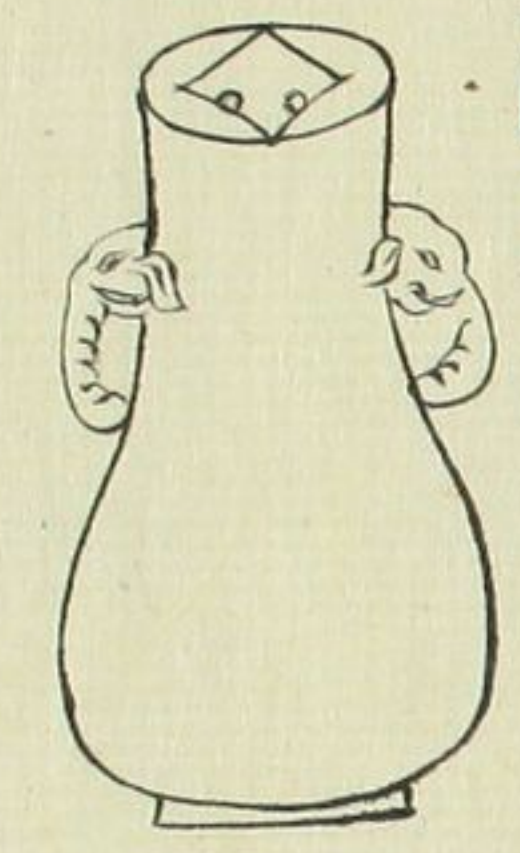
角口の花器ハ角を正面よりんく活らなり  
 身付の毛器ハ身をた右めして並ハ花の出  
 口身のま上の毎らみあさるやうハ活し又時ハ  
 よりて身をさし袖ぢむけ活をもるハ向け極  
 花の出生れ方の身を前へ出らん持なり客位  
 主居た右回極し

角口花生

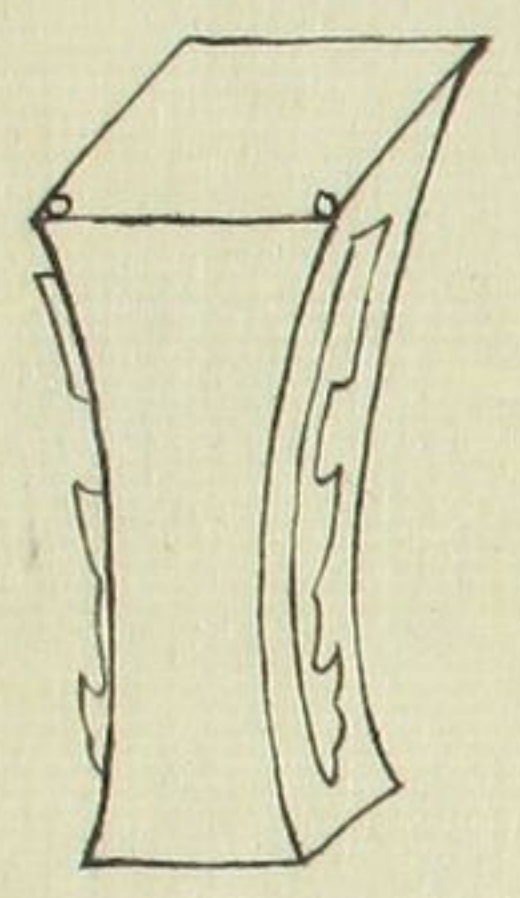


○平花の巾着なり  
 平の横の方ハ花を生れ

耳附毛生



身をた右よりて活らう花の産き  
 前角くといけてす



角口よりても耳付けハ附らる事  
 正面よりてとんく活ら

一卓下花等の事——香炉乃傳

卓下の花を花器を少く向ふべきを又ハ前く  
少くよせてもよ——あか——いさ中かす——い花辨  
少く前くかりてを箱も活れも卓を心と  
云て天地四方いしまし卓もさしめ極は卓の内  
まき活は向ふ事なり卓下に限り花入も少さ  
られハ向正面の活方も日ら明し花は中よりさ  
若くは之居客位ハ枝葉をさしめ——大形の  
花器は活るごとく花辨をかかびきはして之居  
客位をいせぬものなりた、極さしめは活裁なる

形は活るをよ——こと

卓の上は香煙を並く香煙の挿極かしら  
よして卓下の花を言合たりたしハ獅子の魚炉  
ありハ花ハ牡丹花又香炉ありありハ花ハ水草  
の類は下にいけるも持より——香具を極の下座  
を方ハ並なり

かくいしをそ獅子の魚煙なりハ牡丹をかりしは  
用ひありの香炉ハ水又ハ水草をさす事とい定  
魚くハ魚炉と花とを合ふり言合たりしは力  
足ると不足との二つの言はるり初んは教るも持

のふらふら獅子に牡丹あるまに水を多くと注合を記せる  
なりよしく思案ありし

一花器水打と不折との事

喜徳印さこ南条いまり燧の敷と茶のかりて  
流やの何るものみあ不折

龍生なるとい雙向暑中の時水よむらして用く  
を糸の敷さるをよして活るなり

唐洞あまむらしてを候ゆきたてく用  
竹生ハ水よむらしてを候ゆのむら用く

一落板露糸の事

何程の暑中なりとも花意落板ハ水おろすか  
よしくゆきたてく用

他流ハ板底ハ落板花意と不折といふ事一の  
何れとも是ハ茶席たよその事一母や

當流よわいしくハたとハ板底なりとも花意落  
板ハ花意に附るる及具なるゆに用ふなり

一菓物敷の事

柿梨子栗の敷ハ又ハ茄子大豆大角豆の敷ハ  
活花子用て風情ありともを合て食物の敷を  
不用を實となりて後の事ハ花の時ハ糸よ

よりて時々此の活の種敷もあり

実を賞歎の種敷は南天梅もどきの敷を介  
して白ちのみもあり

花実相承として花と実と揃へてはるふ事有り  
方一の種敷なりそとて何れかどめ活花記等  
母もあり

### 一廻花の事

一廻此の意を並てまへあり合かりはく生更  
なり是を茶事かこの席何れい常々も  
茶合會合の折々ともこの母て書院向の子

母を何れに活松を常は活か花別しといけ  
かとして障子町寧よして一日は日活並花  
何れされも折入なけ入の敷花母花事を用も  
下地は有合の梅とを用ひてはか紙くさうくせ  
一風情を活あをく中々の時常くはらけは練  
母一ありらうけおころる魚くさ

け茶を表傳の巻中母て別るの自練業茶あり  
そと上席中乃禮式等々々上席上景式業茶の  
母亦別録は記しるるなり

一客花活の良花と掛物陰陽の事

亭より客へ活花を望みよむいづる時の心なく  
 並花器をよむかけ念をよむも不望ありて活花  
 先一席のうちにおあり候へ夫へ一何いふに云釈て  
 花器の菊よもみ麻あり候掛物の意をい合ひ  
 事なり

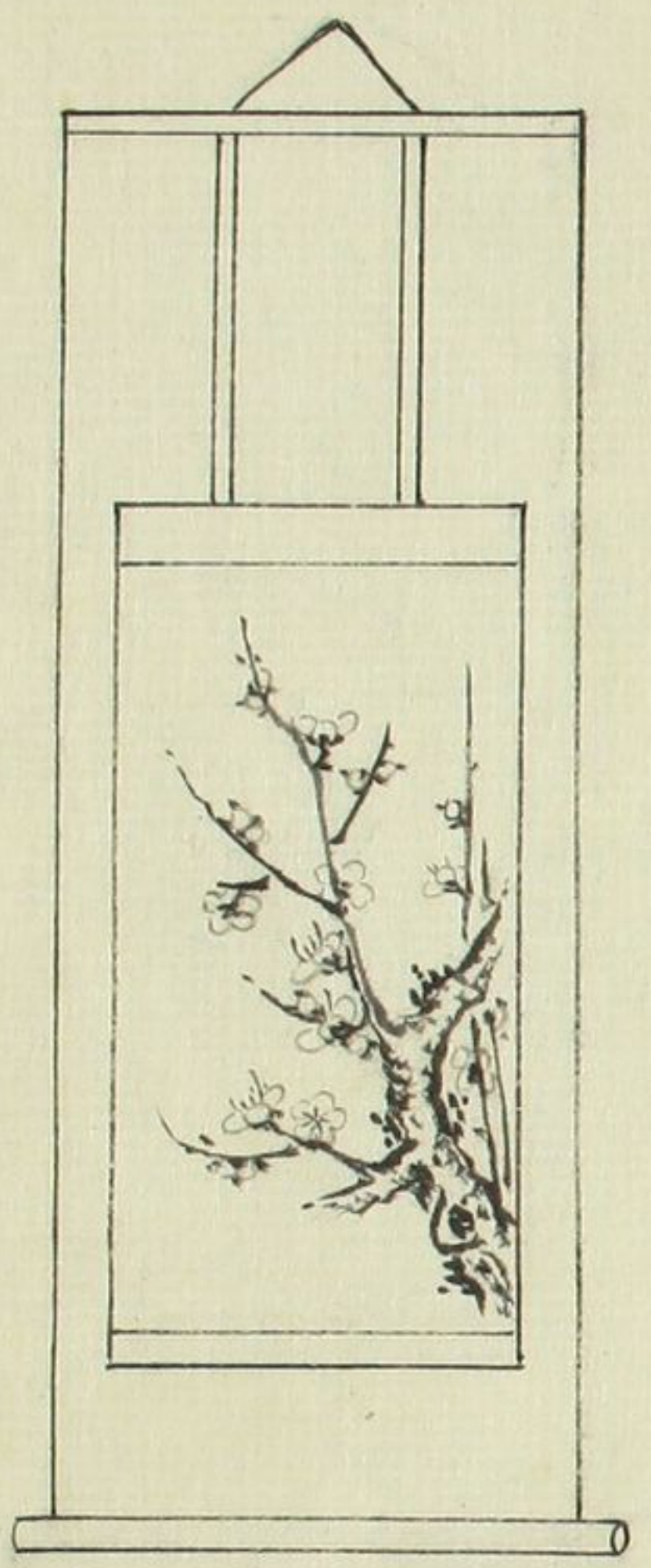
先掛物陰あり候活花を陽は仕立掛物陽

なり候活花を陰は活花を陽は仕立掛物

活花陰とハ並筒まても花辨卑き方 けん物第一なり

たとハ掛繪あり候活花を草花を活掛繪草花  
 陰あり候本を活らん物へ掛物を豎横まてもなり候

見合ある候一掛物の陰右の方より出して画を  
 をらよのあり候活花をたより出生は活へ掛陰  
 たより出して画きたらよのハ活花を右より出生  
 の花辨は活魚一たより出生を陰は活花を  
 たよりの出生は活なりてハ切しよあり候よ  
 考あり候一活方たよ出生を景をいんへ







あゝいなを花新かく見はくろい花忌のうち  
あ中ととも清く見若くかぬ中うにしてゆき  
もゆありまゝ亭まゝ並られまゝの挨拶  
なき時を床程く鼻紙をかきてまゝ花をぬき  
並あり又ハ花忌の上は挨拶なく並てもまゝ  
不望まゝ花あま亭まゝよりまゝ候也並て  
されと挨拶致をゆき

朝白杯をあ入朝あゝハ不望にまゝ活りま  
己の時りまゝあより必入挨拶まゝ故ま  
花ハ不望致を祝の亭まゝハ一席の起功者なり

亭まゝあゝてま不望致まぬまのく是ハあ対て  
云禮不興まゝの事ハ花を不望のあハ活  
花功者あゝハ不望まゝのなり

一回賞祝花忌の事

四季と母ま亭花の起花初忌をまゝゆき  
あ婦ハ花あひま幼少乃人まゝハ本床ま  
活まをまゝ活りま次の間又ハ外座ま  
活酒ハいろく名はくハ花活ハ活並なり

一生残の花納め

是色亭まゝり客ハ活花不望ハてあ花ハ

仕向いと見せしむ、亭より出活残の花又落敷  
たる枝葉等を落しつゝ先小刀をさみ花中ぬきし  
等を一徳の茶盆へ入れ猪子一拵返ぬしむ  
ある亭より對しての陸分抄りの茶なこせられぬ  
花盆へ残し小刀をさみとも盆へさきこいよ上盆へ  
戻す時宜きとて席の首尾は主客切者より入し

一相客花見拵作法の事——

来客の由り亭より花取置はつひと活たるは  
相客より先亭より母人よりとておあつんば  
客は活する茶を亭より一の挨拶の花かれなり

取る花をんはめを花の正面に座し花蓋又は床蓆の  
奥に座し扇子と抜き平座よりありてつる時一徳は  
目録はくるより掛物より活花の指よりつる  
見あつしぬきハの志向りを花汁はぬ花蓋をさる  
なり是れあり時ハ水際のお向りより一徳は目を附  
候く母人よりさきつるよりつるのあり

一掛繪に茶の陰着乃事——

かりぬき下地より茶をさる掛物の繪はつる茶を  
活ぬしつたつる茶陰茶花なつるを活る花一本の  
茶かりは活る茶繪本は茶なつる活花は茶乃

花かちよ活なり同本回草回花をきくと思む  
梅のうけは梅の活花菊は子孫は菊の活花  
考なり

掛物墨紙の時をそと詩文章和歌考よよみ  
何分花をい活るあり皆そ花を思てたる故ある  
なり梅の詩あり梅を活け菊の考あり菊を  
活水仙の文あり水仙を活らん故ありを活る  
そ因この季節もよる魚し同本回草回花を  
活ぬといふも又そ果よるべきあり

一男女赤白の事

紅白の花を活るといふ事ハ祝儀の一の花之習  
乃言あといかありを赤と白との花又を実なと  
吟味く活くよあり

赤き色ハ陽をて男花とし白きを陰をて女花と  
をなを花形五合ありといふ也

一客位主位乃事

上座明り先客位なり末座暗き此方主位あり  
花活やうお位なきハ花の活下座の方より出生  
は活ぬ——さきこれハ花の面々上座の方より入る  
なり主位なきハ花の座と座の方より出生なり

活魚一毛の面く中座より人へなり花忌也  
重振も客位主位を階てより主客をさ方一花  
高を少し振り向らん持く客位の花あり上座へ  
振り向け主位の花あり上座へ振り向らん  
活るる花跡をいれ可き事一行要あり

一五節句の花此事

元三子 梅水仙 福壽草 金箋花 根笹

上巳子 桃柳

端午子 花菖蒲

七夕子 松竹梅 ぎざり

重陽子 菊

右の歌み言句の一の花なりけり故まてしりまも活  
なり

一祝儀は婿の花の事

クチナシ コヤマシキコ イチゴ マンジュシヤケ

レンゲ モクレンゲ ミヅハギ ヤマブキ

ケマシサウ シヤクセンダン トラノヲ ノウゼシカツラ

クハシザウ チニテウケ ボケ シヤラソウジユ

ハシテウケ ハナザシロ イバラ

りやうの歌うつむき花のり花ちり花をさす花

あふこやまきむ花枯葉いさふ末の節りたる枝葉を  
睡ふたり右のうちまもいざの敷ハ針を各除く  
活きハ時よりてらるゝかゞひそ外名の何きもの  
香の何きもの残花乃敷を始ふま勿論し

一 庭後へ不出花乃事

惣して名の初れぬ花 名の何きむ花 香は何き花  
出生はあゝる花 雑木 雑草六種あり 祝儀は  
かきくも賓客をてなり 又あは活花をれハ右  
等の外をよしく 吟味をきき子肝要なり

一 花切ハ時乃事

朝の来ありハ時ハ氣夕に切る也 夕方の来ありの  
時を當日の子朝よりる也 草木よりて是  
たてゝあは涼く入るゝ 水乃揚中ゝ何い  
さゆゝあり 別は昔花傳書よりこれハ交り

~~~~~

一 室咲花切極の事

蒼まきくいまさ咲る花を咲さんと思ふ時ハ花海  
は井の水を汲みく花をかゝふなり 花海ハ燗の  
かゝあとき何く 田子桶乃敷かゝふてより  
室のうちまき海の水を度くかゝてはさるれハ



ふかへ〜これより枝葉花のきひかこは佛像心  
方へ向く活らん枝を枝まとも花まとも向より葉へ  
ふかへむきひ方を身一の事一な葉は枝新向の枝  
新向の花ともいふなり

一 移徙花の事

赤紅色花葉の字乃付る花を引控まへ〜  
水草の類をきふ河骨牡着の類より〜墨草なり  
〜毎水仙なり〜むら〜兎角水縁のある花は  
一 返苔中陰乃花は事  
活方を別まかりなり〜されも花体のたごな

〜ぬ中うに正風体又活あま〜是より花六  
葉も活け又花葉とも下の数をもゆる〜  
これを手向の花といふ

中陰のうちハ赤き色れらの花を引控草木の若も  
仙事一作苔みさ〜あふぬれりのを引控まへ〜  
花体を陰うち又活あま〜むらむらひなり

一 花を葉入の縁へもさす事

客位主位向活正面活とも花を葉入の縁へ附て  
いふあまの活〜れ出せよ〜の風情は活らんあ  
まより花葉のゆら〜地形とんる〜向活を



花器より花よりて花体むい〜活けしき  
事も何事ハ花の力本を前よりんせ〜活の花を  
う〜何事ハ花の力本を前よりんせ〜活の花を  
何事ハ花の力本を前よりんせ〜活の花を  
瓶の縁より下へさぐふ枝をき〜ふなり花器とも  
同前〜是ハ花生れ何れを地形とて活ゆ〜  
柳なり列〜んを付て〜土中〜入と同前〜

一二重切めて客へ花不望乃事

下の重〜先亭〜活並て上の何け並〜る重〜  
客乃花を不望を付なりか〜  
約瓶〜も同〜

事なり二重あり〜客へ不望せんと思ふ時ハ先  
外ハ一懸亭〜活並〜客へ不望を付なり  
外ハ不活並〜二重切〜亭〜より不望なり  
何〜る時を客を上の重〜を〜り活〜下重  
重〜ハ客より亭〜主に不望を付なり

一二重切花器の事

是を付けて活ゆ花器の月乃輪を花母て花系  
母〜も枝〜を〜見切〜ぬ花は活る重のあり床の  
〜ち向ふの〜を〜花の楕〜見〜は〜活〜  
床の母〜又ハ楕〜は〜ぬ〜は〜床の〜ち〜

仕ゆふなり花を足るよき床の正面より足る花  
体あきいその産より足て切れぬ格は活らん行  
要く花形は床のかほちより三尺八寸のうち活  
夫より高くのびていなり、花乃指余りながく  
のむくい志回しいかききよくらん格なり

一出陣籠城並膝立ゆま花の事

熱して秋後よ忌嫌ふ魚き花をいりまも不用く  
出陣籠城は膝立ゆまはよき格は切れぬきき  
ちりやまき産魚すきまきこやまきものを不活  
いふもいきわひつよくいふきよた陽本陽を陸

分丈夫は家をも活なる子行要なり

膝立はわたり花はわひわたり枝あき活ふ子  
より一場合よりて禁忌を意の事一が一の  
らん格なり

一釣花器の事

是をたぐ釣り物まて形はいろ格なるもさほくわり  
船の活方とい遠ふありを花器と回らん格まて  
活るく花器の形よりてらん格もも大くいさ中  
より前くわたりるやうな活るく妻方乃釣緒を足  
切ぬ格は活るい魚一を花よりてを業むつ

うき抱ハ片流ハ見切りてもゆるけしけ活方を  
流枝なくともゆる中まで活仕過ても苦かしく  
船あつてハその系乃出生は活くよし

一出船入舟泊舟の事

船の活方いゆるさ海くあさく流のあつて  
そ傳多しとて母老流は三艘の活方別く  
の習まで世よあつて口傳なればけ理をよく  
考合して活なま時を却るの花体りまも天  
地自然のこつり明白なり

出船ハ座敷の上座ゆり先へ船の船さきを向く

花窓の舟ハむきくまを向なり

活板を花形高くして船のをもれくは活流を  
ゆり枝とく才一のあひく習をけ出船は活時ハ  
流一枝短くあふなり

入船ハ座敷の下座勝手の方へ船の船さきを向  
なり花窓の舟ハむきくまを向なり

活板ハ花形むきくゆり枝かし流一枝を長く  
あふなり是を陰陽またとてソハ陽ハ昂り  
陰ハ降るの道理ありあるゆへは陽の船ハ花  
体高くして後物の形才一の習なり陰の舟ハ

全体をきくして心を通り入来るの形流し  
枝長くきく是則陽ハ昂り陰ハ降るるの形を  
活るなりよしく師傳を更て活海し

泊舟を極さきの向方定ましく此時のよきま  
形も極し

け活方の家の出入の船とハ遠く之花体陰陽ハ  
片よしく此船のみよりの方ありは活く花形ハ  
心きくいう母も志づう母若かといふらん持るは  
活るものよきもの、勢を船の向くまかかす  
うしろへ下けおろして活る是哉いりの心合

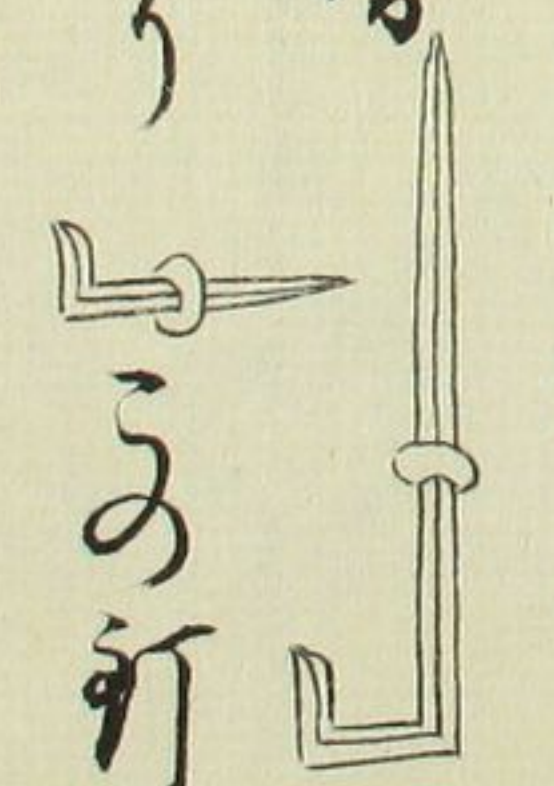
助けの花といふ名あり船中の所ハ花体短く  
船のうちまてよく居り合する体あり向より船の  
うしろへ活おろしさうりたる活るものと体  
花と曰われくにならざるやう母一体もきぬり  
合て花形のうけざるやうは活るを事なり  
よしくん極し

### 一鎖寸法の事

極りたる寸徳ハ母一花芒の形大小母よりて長  
短尺合ふ付てよし折緒母ても回折なり  
釣籠の花芒母ハ鎖ハ不用釣籠の形ハ丸母ても

角巾を二つ釣籠まきも二つ釣籠みきも二つ釣籠  
 折りの何れも二つ釣籠よりの緒を結ひ定寸を丈  
 貳尺のものを釣籠の時に余りをなすて結ひ下  
 何れも二つ釣籠を置釣籠の時に狼よたり並  
 又二車あとの花巻巾は巻付ても並之時のよ  
 一つ釣籠してよ一つ釣籠巾は緒を不用竿を  
 付りも二つ竿を寸尺の極りなし  
 折法の色を 青黄赤白黒好まよ折ふ色  
 他流は糸を免許あくては玄用といふも並  
 流巾は何色まきも好まよ用ゆなり

船の花巻釣籠の花巻を舟の巻巻巾も釣物の  
 時を麻あしを上下せもた右まきも三つ割一分は  
 釣籠の何れも二つ釣籠よりの緒を結ひ定寸を丈  
 落しけりやう貳尺のものを釣籠の時に余りをなすて結ひ下  
 の方へ釣籠も麻極より貳尺のものを並て釣籠  
 麻乃天井へ折ハ二重折釘あり如景  
 落しけりやう折ハ常の寸法の折釘なり  
 其申とた右と折ハ常と裏と裏極は折釘あり  
 麻の其申も釣籠ハ名物の花巻を舟の他又巻  
 宗通の作のものあり其申は釣籠の時に麻乃



掛物はさうりてもゆるびへ一花器の作よりも是を  
當きりのあり又その垣をへ一是皆を附の斗  
才一の事なり手練をくき所要なり

一花器の事

花器の形さ極くありそ中母子のを花器を靈  
照女といふ子のなき花器を麗居士といふ或人のい  
花器の事ハ花板花器を不用花器斗を修居  
二重ハ付をりもよふ一と上花器ハ中に筒を全  
をゆ二重なるもそのなれハ花板も花器を  
不用といふ一と上花器ハ中をゆたよ何に

さうりてもさうりても板麻母並附ハ何何ん又  
中の筒ハ花器の外ハつるものよ何  
素より花器花板ハ器入は流ひつるものなれハ花  
よ一花のつるハ花器ハ馬盟なる一ハ  
花器の沙汰これあり素より花器ハ花器ハ花器  
されハあり是も志いて花器を用人とありハ花器の  
ありありしから何き花

花の活るハ花のなき花器を子細か一子のを花器  
活る時ハ花の前後ハ花器もた右ハ一花器ハ  
手の上の方花器を花器で見切りあり又手のた

右ととも母ん切らもあ〜、たり右の片方をん  
切ら、若〜切らも又手高くた右乃間廣き大籠杯  
又活ら時いら仕廻〜と〜もた右も手よ〜ぬ  
やう又活ら〜

一細口花等の事

口細きゆへは花ぬ花串な〜入〜く〜れ〜ハ折々  
又ハ花の根を割〜け〜して活漁〜水際のおこ〜ぬ  
やう〜や〜く〜あ〜しく活な〜

一蔭板敷板の事

其の目を敷〜く〜並〜といふ事、何れも是昔ハ茶席

の度なり、蓋流〜を〜敷板、床い〜ま〜ても床の入  
幅〜唯〜して向の方四分前の方六分、ゆ〜くた右を  
其中、勿細なり、花蓋、成〜並〜も、回〜りたる、ぬき事、俣  
花母より〜前後の並、亦、足合〜

一古銅茶入汗の事

古き洞の敷を汗をせぬもの〜是ハ汗をさせんと思ふ  
時ハ井の水乃汲き〜せ〜し〜蓋成〜志〜し〜並ハ汗  
を〜るなり、暑中、な〜し、用、茶、蒸ハ汗を〜るものハ、ぬき  
不、名、を、俣、用、る〜地、紋、を、も、のハ汗を、ぬ、ふ汗を、さ、る  
が、よ、ろ〜

一古来茶器の持乃事——

源流はかくも古来源氏深秘の花器と始ち茶編  
五指の茶条の銘器等々を介

源君慈照院殿御秘苑の不致種をこく事なり  
是等の事ハ奥傳の沙汰申して實は向くはきり  
何れをいふ条に出ればはむとて古来名物の花入  
母を爲板花器と不用といふ説何れも名物の器  
なるはれは花器爲板ハ安海寺の器とてさうも  
説も茶席の備申して床のせしめゆへなり——  
茶器ものつらこくは花器ハ爲板花器ハ是れも

安海寺のものにて是ハ硯箱煙草盆のこくし  
火入斗硯石斗ハ不出ものこく四疊のうちの茶床  
なるといふく六七寸位入る床ハ花器爲板ハ  
用ひくくたると用ゆるも余りこくやうなるが  
ゆへ少き花入斗と並ても活るを來ハ板床も  
大床あり是等の床ハ花器爲板試安事——  
向海なり

一花器釘乃事——

折釘うち所古實寸法を凡床のまらより式尺八寸  
高きを三尺七寸とて折なり帯並の床なるを





んを付魚きなり水色は出せのみの花雲の水  
際の方へ入らん故より——かくついで魚んを  
片意地は一籠の目づらなる中へこへいけなとこへ  
そるまといちがいはん故ぬるいもぐこなる画意は  
よりきもをきふて流は流よき花をきふい不宣  
たとい柳は魚心とをきふいき可い他画花より  
柳と流はより懸くけんとをいふく美端んを付  
魚き事なり

一掛物の豊横はあふ事——

豊物は對して活る系は卑く横物は對して

活るを高くなむを相の繪詩歌文章等の  
ん故乃事——前の筆糸花と掛物陰陽のよと  
いふ所をよりくらん故——

一座敷のありし生格乃事——

座敷の廣狭ありし活る花体も大小何れも  
勿論張付物と後の絵は何れものい草本ともは  
用控よりしをそ一回のうちに目さきはる事と  
活るなり

一庭の横はありし生格の事——

是も庭のうち植はるる草本をり用控より

是又目先より人されハ極木のうちより何る事  
本を活くも昔くく

一三重切生極の事

上の重きものをも登り且活下の重き上は花を更く  
かきくこしく入上の花たより出生あつた下ハ  
右より出生乃ん指く二重なれども上下一体と  
活なれなれハより何ひか一上下回物を木活  
色を敷も各合ひか一の事なり

け活合身一の大事事にて各合ふ死不各合死と已は  
取て已は各ふ銘く力をおして起る事なり

活花を初よりあるよりして云理母枝系花を  
知辨りたりありとめても本意よ計るこよく  
分別何る極くよくしてあつたといふ極く  
何しくしてよれたも回象の子くよくく

一三重切活極の事

是又重く毎は回物或は活花体ハ二重回体は  
あつたる極母容位正位正面活なれ二重なり  
花体をかきく生体か指く二重切母て或或人  
亭をよも三人活なりよ計時ハ先亭をよ出て  
花を下の重く活なりよ次は各人連上の二重く



花をもちおもしろせし花ハ茶の何いとも附する  
なまこハ時の珠花をんまらる中を専一とんね  
魚し

以上

源氏活花表傳授五拾四巻条之口傳  
抄書終

請福井道化宗匠以誓寫之

林翠山



文化八歳 辛未夏六月中旬

